

## 【論文】

# 再帰性とメタ認知 —ドイツ語の再帰動詞を手掛かりにして—

萩野 蔵 平

## Reflexivität und Meta-Kognition —anhand von deutschen reflexiven Verben dargestellt—

Kurahei OGINO

## 要旨 (Abstract)

Im vorliegenden Beitrag handelt es sich um eine Überarbeitung meiner Austrittsvorlesung, die am 7. März 2020 an der Universität Kumamoto vorgesehen war, jedoch wegen der Corona-Krise leider nicht stattfinden konnte. Die Meta-Kognition, die auf kognitiver Ebene als Denken über das eigene Denken bzw. Wissen über das eigene Wissen definiert wird, drückt sich auf sprachlicher Ebene in der Reflexivität aus: z.B. sich betrachten/自分を見つめる. Ziel dieser Arbeit ist es, anhand von deutschen und japanischen reflexiven Verben festzustellen, wie unterschiedlich stark die Meta-Kognition in beiden Sprachen ausgeprägt ist. Zusammenfassend lässt sich sagen, dass die unterschiedliche Konkretion der „Ich-Spaltung“ bei den Deutschsprachigen und den Japanischsprachigen eng mit einigen Eigentümlichkeiten der deutschen und der japanischen Sprache zusammenhängt: erstens mit den reflexiven Ausdrücken, zweitens mit der Diskursstruktur und drittens mit der Subjekt-Prädikat-Relation und schließlich mit der Sprecherperspektive.

キーワード (Keywords) : 再帰性、再帰動詞、メタ認知、自我の分裂、自我の客体化・他者化、モノログ型談話・ダイアログ型談話、主語顕著性、主観的事態把握・客観的事態把握。

人間とはそれがあるところのものではなく、  
あらぬところのものである—サルトル

## 0. はじめに

2020年は本来ならば東京オリンピックイヤーとなるはずであったが、新型コロナウイルス禍のため翌年に延期されることになった。ただし開催は2021年だが、名称は「2020年東京五輪」のままだという。なぜオリンピックの話から始めたかということ、1996年アトランタ五輪の女子マラソンで銅メダルを獲得した有森裕子選手のある名言が本論のテーマと深く関わるからである。ゴール後のインタビューで彼女はこう言ったのである。「初めて自分で自分をほめたいと思います」。このことばは当時随分と話題になり、1996年の流行語大賞にも選ばれた程だ。

ところでこの「ほめる」ということばで表されている行為は「AさんがBさんをほめる」というときには、「ほめる」という行為がAさんからBさんに向かうが、これを「AさんはAさん本人を

ほめる」とすると、今度はその行為は結局のところAさん自身に再び帰っていくので「再帰動詞」(reflexives Verb)という言い方になる<sup>1</sup>。日本語の「自分」にあたる再帰代名詞はドイツ語ではsichとなるので、両言語においては次のような対応が生じる。

- (1) a. 自分をほめる／自分をしかる／自分を励ます／自分を裏切る  
 b. sich loben / sich tadeln / sich ermuntern / sich betrügen

さてこれらの表現に共通するのは「自分をもう一人の自分が見つめる」ということであり、これは認知科学や脳科学で言うところの「メタ認知」(Meta-Kognition)に当たる。「メタ」とはギリシャ語の接頭辞meta-に由来し、「～より一段上の」や「～を超えた」という意味を付加する。つまり「メタ〇〇」とは「〇〇を一段上で〇〇すること」を意味するわけだ。したがって理論についての理論は「メタ理論」、言語についての言語は「メタ言語」となるのと同じ論法で、「メタ認知」とは「認知についての認知」、すなわち「自分がどう認知しているかを認知すること」となる。

再帰動詞の用法には次章で見るようにいくつかの種類があるが、「自分をもう一人の自分が見つめる」というメタ認知が言語化されるその手段として再帰動詞が用いられるのは自然なことと言える。本論文では、ドイツ語と日本語の再帰動詞を概観した後(第1章)、メタ認知に現れる自我分裂、自我の客体化・他者化について論じる(第2章と第3章)。続いて、両言語の再帰表現に見られる言語的相違が、ドイツ語母語話者と日本語母語話者のメタ認知のあり方にどのような影響を及ぼしているのかについて検証していく。その際取り上げるのは、「一人称と二人称の対立と同化」(第4章)、「主語顕著性」、「主語・目的語の二項対立」ならびに「発話の主体としての話者の視点」(第5章)といった論点である。本論文全体を貫く基本的な関心は、言語構造の相違と話者の思考(自我観)との間にはどのような相関関係があるのかということだが、ここでは「文化がことばをつくるのではなく、ことばが文化をつくる」という立場を支持したい。

## 1. 再帰動詞の用法について

メタ認知の議論に入る前に、まず再帰動詞の用法を概観しておこう。再帰動詞とは、形式的にドイツ語ではsich、日本語では「自分・我」、英語ではoneselfを伴う動詞のことであると定義しておく。再帰動詞についてはこれまでにいくつかの分類が提案されているが<sup>2</sup>、ここでは柴谷(1997)の類型論的な分類が参考になる。それによると再帰動詞は、<再帰→自発→属性→受動>の順にその使用領域を拡張していく。この枠組をドイツ語、日本語、英語に当てはめてみると、再帰動詞はドイツ語において著しい発達を遂げていることがわかる。以下、その例をa.ドイツ語、b.日本語、c.英語の順に挙げる。なお、文例に付けた\*(アスタリスク)は「非文」であることを表わす。

[再帰]

- (2) a. über sich selbst nachdenken b. 自分(自身)を省みる  
 c. reflect upon oneself
- (3) a. sich waschen b. \*自分を／体を洗う c. wash oneself
- (4) a. sich setzen b. \*自分を座らせる／腰を下ろす／座る c. sit down

[自発]

(5) a. Die Tür öffnet sich.      b. ドアが開く。      c. The door opens.

[属性]

(6) (人称構文) a. Das Buch verkauft sich gut.      b. その本はよく売れる。

c. This book sells well.

(7) (非人称構文) a. In Kumamoto lebt es sich gut.

b. 熊本は住み心地がいい。      c. Kumamoto is comfortable to live in.

[受動]

(8) a. Das findet sich überall.      b. それはどこでも見つかる。

c. It can be found everywhere.

まず(2)から(4)までがいわゆる本来の「再帰的」用法に該当する。(2)は本論文で考察する「メタ認知的用法」に当たるので次章で詳しく論じる。(3)は「身体の手入れ」、(4)は「身体の姿勢の変化」である。これらはおよそ再帰動詞を持つ言語ではまず最初に現れる領域だが、ここで取り上げた3言語を比較すると、その使われ方に特徴的な相違が見られる。すなわちドイツ語ではすべての領域でsichが出てくる一方、英語は(4c)でoneselfが消え自動詞化している。また日本語の「自分」については、(2b)のように「意識主体」を表す場合にだけ使用可能で、(3b)(4b)のような「身体(部位)」の表示には使えないことから、日本語は再帰代名詞の使用範囲がかなり狭いことがわかる(廣瀬・加賀1997: 80参照)。

再帰動詞が次に拡張される領域は(5)「自発」である。だがここでも再帰動詞が使われているのはやはりドイツ語のみで、日本語、英語とも自動詞化している。この傾向は(6)の「属性」においても顕著である。これはいわゆる「中間構文」と呼ばれるものであるが、ドイツ語ではsichが引き続き用いられる一方、英語では自動詞構文となる。(5a)と(6a)からも明らかなように、ドイツ語では他動詞を自動詞化する場合にはsichの出現が不可欠である。(7a)はドイツ語では「属性」を表す表現がさらに非人称構文まで及んでいること、また(8a)は最終段階の「受動」にまで達していることを示している。このようにわずかな例を見ただけでも、ドイツ語は再帰動詞が非常に発達した言語であることがわかるであろう<sup>3</sup>。そしてそのことはむしろ、ドイツ語的思考やドイツ語話者のメタ認知の強さと無関係ではない。

## 2. メタ認知的用法について

一つの譬え話から始めることにしよう。ある建物を眺めようとするとき、我々はどこにいなければならないだろうか。当たり前なことだがその建物の中にはだめで、一度外に出ない限りそうすることはできない。それとちょうど同じことが我々が自分自身を見つめる場合にも言える。要するに、自分の外に自分を見つめるもう一人の自分を設定する必要があるわけである。これを称して「メタ認知」と呼ぶのだが、そこで起こっているのが「自我分裂」という現象だ。自我分裂と言ってももちろん精神病理学的な意味ではなく、人間に普遍的に備わっていると考えられる自分を客体化する能力のことである。では自我分裂というとき、この二つの自我とはどのような存在であり、両者の間にはどのような関係があるのだろうか。ここではまず最初の問題から考えてみよう。その時にヒントとなる

のが、日本語で「我を忘れて逆上する」「我に返る」などと言ったときの「我」を含む再帰表現である。

- (9) a. Ich bin ganz außer mir geraten.      b. 私は（逆上して）我を忘れた。  
 c. be beside oneself
- (10) a. Ich bin wieder zu mir gekommen.      b. 私は（冷静になって）我に返った。  
 c. come to oneself

(9)が述べる「私は(逆上して)私自身を見失った」とは、要するに「<今の私>が<いつもの私・本来の私>を見失った」ことを表し、(10)の「私は(冷静になって)私自身に戻った」とは、逆に「<今の私>が<いつもの私・本来の私>に戻った」ことを意味する。メタ認知において生じる自我の分裂とは、私が<本来の私>と<本来ならざる私>という「二つの私」に乖離することを表している。

次にメタ認知の典型例としてしばしば話題に上る「鏡の中の自分を見つめる」というケースを取り上げてみよう。

- (11) a. Ich betrachte mich im Spiegel.      b. 私は鏡の中の自分をみつめる。  
 c. I look at myself in the mirror.

さてここで生起していることは「私が鏡に映った自分を見ている」という事態に違いはないのだが、「鏡に映った自分」を凝視し続けていると興味深いことに、まるで「鏡に映った自分」から「鏡の前に立つ自分」の方が見つめ返されているような錯覚に陥ることがある。鏡の前の自分の方が本来本元のはずだが、その地位が鏡のなかの自分に奪われてしまったかのような、いわば主客の逆転現象である。すると今度は「鏡の前に立つ自分」に向かって「鏡の中の自分」が何やら色々と話しかけてくるようになる。「お前はなんて馬鹿なことをしでかしたんだ」「お前は人間の屑だ」「くよくよするな」「がんばれ」。この場合、どちらの自分が(9)や(10)で見た「本来ならざる私」および「本来の私」に相当するかと言えば、逆転した関係を反映している枠組みの方、すなわち<本来ならざる私=鏡の前の私>、<本来の私=鏡に映った私>となる。以下においては、<本来ならざる私>を「現実自我」と、<本来の私>を「理想自我」と呼ぶことにする。そして「理想自我」とは何かと言えば、理性、良心、あるいは法律などの諸規範、社会や世間のルールなどが要求するところの「自我のあるべき姿」のことである<sup>4</sup>。メタ認知とは、つまり「理想自我」と「現実自我」との間の対話を意味する。

### 3. 「現実自我」と「理想自我」

前章において自我の分裂とは「現実自我」と「理想自我」との分裂のことであると述べたが、このテーマに興味を抱くきっかけとなったのが関口存男の論文「再帰的表現とExistenzの解釋」(1966)であった。それによって、再帰表現の可能性を最大限に利用しているがゆえに、ドイツ語がこの問題を考える上での格好の道しるべとなることを教えられた。本稿では彼の議論を参考にしながら、自我の捉え方と再帰表現の関係について、近年の言語学からの知見をも取り入れながらも一度考えてみることにする。

議論の出発点としたいのは、関口(1966: 261)も引用しているドイツ人哲学者ルードルフ・オイケ

ン (Rudolf Eucken 1846-1926) の次のことばである。

- (12) So ist der Mensch ein Wesen, das über sich selbst hinauswächst, etwas, über das wir hinaus- und zu dem wir hinaufstreben müssen.

(Eucken 1908/1914<sup>2</sup>: 66. 下線は筆者による)

カント、フィヒテ、ヘーゲルに代表されるドイツ観念論哲学を継承し精神生活を重視するオイケンにおいては、自我とは弁証法的発展を遂げる存在であるべきだ、という認識が際立っている。(12)は自我の発展について述べたものだが、そこに描かれる発展する自我の諸相のどれが「現実自我」で、どれが「理想自我」に当たるのかに注意しながらみていこう。まずüber sich selbst hinaus- (自らを超えて) のsich selbstと、etwas, über das wir hinaus- (その何かを超えて) のdasはともに「現実自我」に相当する。それに対して [etwas,] zu dem wir hinauf-のdemは、「そこを目指して上へ」の意味となるので「理想自我」となる。したがってそれを踏まえて訳せば、「だから人間は自ら [=現実自我] を超えて成長しようとする生き物である。すなわち我々がそれ [=現実自我] を乗り越え、またその高み [=理想自我] を目指していかねばならない何物かである」となろう。その場合の「現実自我」としての自我は、一刻も早くそこから脱却せねばならない仮の宿にすぎないものであるのに対し、「理想自我」としての自我は、一刻も早く到達されねばならない存在である。だが「理想自我」と言えども一度到達されると今度は「現実自我」となるので、人はさらに上の「理想自我」を目指さねばならない。つまり自我とは、いずれの意味においても「存在しなくなるために存在する」ものであり、絶えざる弁証法的発展を繰り返して自己実現すべきものとして定義される<sup>5</sup>。

さて、自我を動的なもの、あるいは可能態として捉えるこのような人間観をドイツ文学の世界でも鮮明に具現している人物を一人挙げるとすれば、それはやはりゲーテのファウストということになろう。あらゆる学問を究めたがそれでも飽き足らず、世界を統べる根源的な原理を解明しようとする主人公のファウストは、若さと快樂、そしてあらゆる知識を手に入れるために悪魔メフィストと例の契約(賭け)を結ぶ。だがそこには(13)に見るように、「時間よ止まれ」と口にするやいなや、メフィストが彼の魂を地獄に連れ去ってもよい、という条件が盛り込まれていた。

- (13) Werd' ich zum Augenblicke sagen:

Verweile doch! du bist so schön!

Dann magst du mich in Fesseln schlagen,

Dann will ich gern zugrunde gehn! (Goethe: *Faust*, 1699-1702)

「おれ (=ファウスト) がある瞬間に向かってこう言ったら、／『止まれ お前は本当に美しい』

／君 (=メフィスト) はおれを鎖につなぐがよい、／おれは喜んで滅びよう」

ではなぜ時間に向かって「止まれ」と言うとその代償として地獄行きの罰が待っているのであろうか。それはこれまで見てきたような自己実現、自己完成を人生の意義とする人間観が支配する世界では、人間は時間と共に発展していくべきものだと考えるので、時間は自分を高め、深める契機、すなわち「進歩」と同義となる。「時間よ止まれ」と叫ぶことは、動的自我、時間的自我の否定であり、

それはつまり自己満足、現状肯定に同意することになり、罰せられねばならないのである。

そのような人間観に立つならば、努力の際に犯す過ち、「トライ・アンド・エラー」はむしろ望ましいこととして是認される。したがって『ファウスト』からの引用の中で最も人口に膾炙する箴言(14)にしても、単に「人は努力する限り過つものだ」ではなく、「過ちを繰り返していることこそが進歩していることの証し」と解釈することは充分可能である。またさらに、ファウストはグレートヒェンをはじめとして幾人も人間を死に追いやるという大罪を犯しているのにもかかわらず、作者ゲーテがファウストを破滅させることはない。反対に戯曲の第二部終幕において、ファウストの魂をメフィストに引き渡すことはせず、むしろ彼の魂を救済すべく聖母マリアとグレートヒェンが天上から見守るなか、天使に(15)のせりふを言わせるのである。

(14) Es irrt der Mensch, solang'er strebt (317)

「人は努力する限り過つものだ」

(15) Wer immer strebend sich bemüht, /

den können wir lösen (11936-7)

「常に〔理想自我を〕求めつつ励むものを私たちは救うことができる」

ファウストが具現している西洋の自我とは、つまり今の自分に影響を与えて変化させ、理想の自我を目指す「動的自我」「時間的自我」「可能態としての自我」のことである。

#### 4. 日独語比較(1): 一人称と二人称の対立と同化

「自分自身を反省する」を意味するメタ認知は、人間固有の普遍的な特徴である。この能力は、人間以外の生物、例えば類人猿にも認められないものだ。なぜかという、本能が備わっている彼らは外界に対して的確に対応できるため、そもそも反省する理由がないからである。一方、本能の壊れた生物としての人間は、いわば「代理本能」としてのメタ認知によって自らの行動が適切かどうかをその都度チェックする必要に迫られる。

このようにメタ認知機能は、たしかに人間に普遍的に備わった能力ではあるが、その一方でこれまでの議論からもわかるように、西欧文化圏は再帰的思考、メタ認知的思考が日本などと比較した場合、かなり発達した地域であることもまた事実である。本章および次章において、その相違を生み出す要因として、ドイツ語と日本語に認められるいくつかの固有の言語的特徴を指摘したい。まずは「モノローグ(独り言、独白)」(Monolog)における人称使用の問題から見ていこう。

(14)に挙げたファウストの有名なせりふを俟つまでもなく、過ちは人の世の常である。過ちを繰り返すたびに人は自分自身に腹を立てて、その理由について自問自答したり、最後には詰問に及ぶこともあるだろうが、そのようなとき日本人と西欧人とは自称の仕方に大きな違いが見られる。すなわち、前者が「おれはなんてバカなんだ」「おれはなんというバカなことをしでかしたんだ」と自分自身を<一人称>で呼びかけるのに対して、後者は「お前はなんてバカなんだ」「お前はなんというバカなことをしでかしたんだ」と<二人称>で呼びかけることを好む傾向がある。それについてはSchneider (1960<sup>2</sup>: 130)がドイツ文学作品の用例に即して興味深い分析を行っているのだが、ここではその中から『ファウスト』にもう一度登場してもらおう。

(16) Und du! Was hast dich hergeführt?

Wie innig föhl' ich mich gerührt!

Was willst du hier? Was wird das Herz dir schwer?

Armsel'ger Faust! ich kenne dich nicht mehr. (2717-2720)

「しかしお前は、一体お前はどういうつもりでここへ忍んできたのだ。／

ここへきて己は心の底から感動させられた。／お前はここに何を求めているのだ。

なぜお前の心は重いのだ。／哀れなファウストよ、お前は変わったなあ」

(新潮文庫：高橋義孝訳。下線は筆者)

これは第一部の「夕方」からの一場面で、グレートヒェンを誘惑しようとメフィストの手引きで彼女の寝室に忍び込んだものの、ふと良心の呵責に苛まされるファウストのひとり語りのシーンである。ここで問題となるのは、最後のせりふArmsel'ger Faust! ich kenne dich nicht mehrにおけるichとdichの関係である。直訳すれば「おれはお前をもはや知らない」となるこのichとdu/dichは、一体誰のことを指しているのだろうか。その関係を「いつもの自分」、「いつもならざる自分」という区別を使って説明すると、ここでichで呼ばれる自分は、前者に相当するのに対して、du/dichで呼びかけられている自分とは、すなわち官能の虜になってここにやってきた自分のことを指して言っているのが後者に当たるだろう。「いつもの自分」が「いつもならざる自分」を他者化して眺め、「おれはそんなお前を知らない」と言っているところがいかにもドイツ的である。それに対して日本人にはそのような自我の客観視は馴染みがないので、むしろ「おれには自分で自分のことがわからなくなった」のような自虐的な表現を好むのではなからうか。

これらはモノローグの言語処理に関係する問題である。日本語ではモノローグ（独白）はモノローグのままだが、ドイツ語ではモノローグをダイアローグ（対話）として展開する。池上（2000: 253-266）は、日本語のようにモノローグがコミュニケーションの基本パターンである談話、したがってダイアローグでさえもモノローグ的になるタイプの談話を＜モノローグ型談話＞と呼び、反対にドイツ語のような西欧語ではダイアローグがモノローグにまで拡張している、つまりモノローグといえども自分自身との対話、自分自身とコミュニケーションすることとして捉えるタイプを＜ダイアローグ型談話＞と呼んでいる。

ではなぜそのような違いが生まれるかと言えば、その原因の一つとして考えられるのが両言語における人称対立の違いである。＜モノローグ型談話＞としての日本語ではもともと人称が明確ではなく、その使い分けはしばしば状況によって左右され、人称の融合も稀ではない。例えば、(17)の「テメー」（=手前）、「オノレ」（=己）、「ジブン」（=自分）は、本来の一人称が二人称に転用される現象で、人称の融合が生じている（養老2005:10-11を参照）。

(17) a. 「テメー、文句があるか」(時代劇)

b. 「オノレ、不屈き者」(時代劇)

c. 「ジブン、ナメとんのか」(関西方言)

一人称と二人称の融合とは、相手の領域を認めず、相手を自分の領域に引き込むことである。そ

れは、例えば「ジブン」を相手に用いる事例からもわかるように、「一体感」「親密さ」「連帯感」を醸し出す有効な手段ともなりうる反面（「私、カレーライスにするわ。ジブン、何食べる？」）、相手の領域の自立性を認めないので侮蔑的な言い方になったりもする（17c）。このような現象をBrown/Levinson（1987）の「ポライトネス理論」では、「他者に邪魔されたくない」、「自分の領域を冒されたくない」という欲求に基づく「ネガティブ・ポライトネス」に対する侵犯として説明する。

また同じく池上（2000）によると、日本語に見られる＜モノログ型談話＞では、普通の対話と言えども一方通行的な「独り言」になりかねず、意思疎通がうまく機能しなかった場合の責任は、聞き手側の話し手の意を汲むことの不得手さに求められる一方、西欧語における＜ダイアログ型談話＞では、話し手側の表現力不足に求められる違いがあるという。このように日本語のようなくモノログ型談話＞が優勢の言語では、通常のコミュニケーションの形態であるダイアログにおいても一人称と二人称の対立が、したがって主客の対立が中和されてしまうため、ましてはモノログが西欧語のようにダイアログの形態をとることは考えにくい。一方、＜ダイアログ型談話＞が無標となる西欧語においては、話し手（ich/I）がまずあり、相手が話し手になると今度は自分が聞き手（du/you）に回るという関係が揺らぐことのない基本パターンであるため、両者の対立が融合されることはなく、モノログにおいてもその関係は維持されるというわけだ<sup>6</sup>。喩えて言うならば、ダイアログと同じ構造を示す西欧式モノログでは、法廷で自分の分身が検察官となって被告としての自分の責任を攻めたてているかのような印象を持つのに対し、日本式モノログでは、被告としての自分は検察官も兼ねているため、責任追及がどうしても甘くなる感が否めないであろう。自我の分裂、自我を客体化・他者化する度合いは、日本人よりもドイツ人の方が強い一つの証拠である。

## 5. 日独語比較（2）：主語・述語構造と話者の視点

### 5.1 主語・述語構造

再帰構文に見られるメタ認知的思考は、これまで見てきたようにドイツ語、日本語のどちらにも共通して認められるものだが、その強さの度合いの点で両言語にはかなりの隔たりが見られる。前章ではそれと関連する言語現象として一人称と二人称の対立と同化を見てきたが、ここではさらに「主語顕著性」と「主語・目的語の二項対立」の問題を取り上げてみよう。

「主語顕著性」（subject prominency）とは、ドイツ語を含む「平均的ヨーロッパ標準語」（Standard Average European: SAE）<sup>7</sup>と呼ばれる言語群において典型的に見られる現象で、表層の代名詞主語の義務化のことを指す（松本2006: 121）。例えば、（18）のラテン語とドイツ語を比べてみると、後者において代名詞主語が義務的となっていることがわかる。主語の義務化によって＜主語＋動詞＞という構造が定着するにしたがい、ドイツ語や英語でも、（19）ではesやitといった仮主語／代役主語（dummy subject）が出現し、また（20）では非人称構文の人称構文への移行が確認される。

(18) amo – ich liebe, amat – er liebt

(19) pluit – es regnet; it rains

(20) mich hungert → ich hungere/ich habe Hunger;

Methinks → I think.



代名詞主語の義務化によって西欧語の基本的な語順は、ドイツ語ではich sehe den Bergつまり<主語+動詞+目的語>となり、ここに<主語—目的語>、そしてそれは同時に<主体—客体>の「二項対立」からなる基本構造が成立する。これが再帰構文になると<主語—sich>として現れ、Ich sehe michでは「主体の私」が「客体として私」を反省的に見つめるという枠組みができあがるわけだ。

それでは日本語はどうであろうか。Ich sehe den Bergに対応する日本語文は何であろうか。主語が義務的でないためドイツ語のような二項対立がはっきりしない日本語では、Ich sehe den Bergに対応する文は「私は山を見る」ではなく、むしろ「(私に) 山が見える」になるだろう(金谷2004: 58-59を参照)。実際、ich habe kein Geld, ich verstehe Deutschに見られる<主格+対格>という「二項述語」に対応するのは、「(私に) 金がない」「(私に) ドイツ語がわかる」といった<(与格+) 主格>、つまりあたかも「一項述語」であるかのような構造である。それでは「(私に) 山が見える」に対応する再帰表現は何になるかと言えば「(私に) 私(自分)が見える」ということになる。つまり、ich sehe den Berg—ich sehe michに対応するのは、「(私に) 山が見える」—「(私に) 私(自分)が見える」のペアとなる。両言語の違いは明らかであろう。前者が自覚的・意図的な行為であるのに対して、後者は「自ずとそうなる」といった自然発生的な捉え方になっている。これをメタ認知文と呼ぶことはもちろん可能だが、責任の所在の明示という点からするとやや躊躇せざるをえず、日本語はそもそもメタ認知的思考を支える言語手段に乏しいのではないかと思えてくる<sup>8</sup>。

## 5.2 発話の主体としての話者の視点

さらに自我の分裂の程度の点で関連するのが「発話の主体としての話者の視点」の問題である。例えばEr sieht den Bergという場合、「山を見ている彼を」見ている発話の主体としての「私」がいるわけである。すると主語を一人称に変えてIch sehe den Bergとしたところで、「山を見ている私(=当事者)」を見ている「私」(=観察者)がいることには変わりはない。このように発話の主体としての話者が問題の事態の外にいて観察者として客観的に事態を把握することを、池上(2003/2004)は「客観的事態把握」(objective construal)と呼ぶ。一方、話者が問題の事態の中に自らを置き、その事態の当事者として体験的に事態を把握することを「主観的事態把握」(subjective construal)と呼んでいる。Ich sehe den Bergが前者とすると、後者に相当するのが「(私に) 山が見える」である。ここではいわば観察者が当事者と一体となって事態を体験しているので、「観察者としての私」と「山を見ている当事者としての私」との区別、つまり自我の分裂は起こりえない。そもそも再帰的思考・メタ認知的思考そのものが「客観的事態把握」を前提とする以上、「主観的事態把握」を好む日本語のような言語の話者にはそのような思考は親和的ではないだろう。

## 6. まとめ

本論文では、ドイツ語と日本語の再帰表現を通してドイツ語話者と日本語話者のメタ認知の在り方についての分析を試みた。その議論は次の4点にまとめることができる。

- 1) 自我の分裂、自我を客体化・他者化する度合いは、日本人よりもドイツ人の方が強い<sup>9</sup>。
- 2) 西洋の自我とは、今の自分に影響を与えて変化させ、理想の自我を目指す「動的自我」「時間的自我」「可能態としての自我」のことである。

3) ドイツ人と日本人のメタ認知的思考の強さの相違は、ドイツ語と日本語の言語的特性、とりわけ i) 再帰動詞の発達の度合い、ii) 「一人称と二人称の対立と同化」、iii) 「主語顕著性」ならびに「主語・目的語の二項対立」、iv) 「発話主体による事態把握の視点」と関連している。

4) 文化がことばをつくるのではなく、ことばが文化をつくる。

言語は、あらかじめ存在する現実や思考を反映するのではなく、言語によって現実・思考の分節化やカテゴリー化が異なる、という考え方は、「言語相対論」「サピア・ウォーフの仮説」と呼ばれる。自我意識は、人間にとって普遍的現象であるにしても、3) に挙げたドイツ語固有の言語構造の存在が、ドイツ語話者における自我意識の実在感を高め、メタ認知思考をさらに増幅させているのではないかと考える。

最後に、今回のテーマとのつながりでドイツ語研究の意義についても一言述べておこう。ドイツ語研究の意義としては、もちろんドイツ語の構造そのものの客観的記述ということもあるが、それと並んで本論文で試みたような、ドイツ語を手掛かりにしてドイツ語話者のものの考え方や人間観、ひいては世界観を探るといった魅力的な仕事があるのではなからうか。では彼らのものの考え方を知ることには何の意義があるかと言えば、それは近代文明（の光と影）を生み出したヨーロッパ人のものの考え方を知る必要があるからである。ではヨーロッパ人のものの考え方を知ることには何の意義があるかと言えば、それはつまるところ「人間のものの考え方」「人間とは何か」という問いに帰結するためである。一ドイツ語研究者の成しえることは、一粒の砂粒ほどに小さいものかもしれない。だがドイツ語研究と言えどもそのはるか先において人間研究とつながっているのだ、という「学問研究の大いなる連鎖」についての意識を持ち続けることは、研究者のみならず、ドイツ語学習者にとってもまた大切なことであるように思う。

\*筆者は、2020年定年退職を迎えるに際し、3月7日に熊本大学文学部において最終講義を予定していたが（題目「自分を見つめるもう一人の自分—ドイツ語の再帰表現を手掛かりにして—」）、新型コロナウイルス感染拡大防止のため講義は中止となった。本稿はその時の発表原稿をまとめ直したものである。

## 注

- 1 近年では用語としては「再帰」が定着したが、以前は「反照」も用いられていた。例えば、英文法では oneself のことを細江逸記『精説英文法汎論』（泰文堂、1942年）が「反照目的」と、また齊藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』（岩波書店、1952年）が「不定反照代名詞」と呼んでいる。実は語源的にはむしろこちらのほうが正確だ。ドイツ語の reflexiv はラテン語の reflecto（曲げ返す）に由来し、もともとは光や音が「跳ね返ってくる」の意味である。Reflexnerv（反射神経）、bedingter Reflex（条件反射）というときの「反射」にそれが見える。また「反射する」から出発した reflektieren が、「自分の姿が鏡に映し出される」という用法を媒介にして、やがて「反省する」というメタ認知的意味に移行していったのも自然の流れと言えよう。
- 2 例えば、Duden (2009<sup>8</sup>)、Eisenberg (2006<sup>3</sup>)、Haider (1985)、Kunze (1977) など。

- 3 ドイツ語の再帰動詞は、その範囲が受動的用法にまで及んでいるが、フランス語や北欧語と比べると文法化の程度はまだ低いようだ。例)「家が建てられる」\*Das Haus baut sich. Le maison se construit. [デンマーク語] Huset bygges. なおデンマーク語においては、ドイツ語のsichに相当する再帰代名詞sikが文法化して動詞の屈折語尾-(e)sとなっている。下宮 (2001: 87-95)、Plate (1935: 86) を参照。ところで金谷 (2004: 63) によると、「英語をはじめとする西洋語でも、再帰表現の発生は比較的新しい。例えば、ラテン語ではほとんど見られず、フランス語やイタリア語などでもラテン語から分化した後に発達したものである」という。再帰性は古典語においては、ギリシャ語では主として「中動態」(Medium) が、ラテン語では「形式受動態動詞」(Deponens) が担っていた。中動態はゲルマン語において消滅したが、その用法は再帰動詞によって受け継がれた ([ ] 内はラテン語の形式受動態動詞): sich erbarmen (憐れむ) [misereri]、sich bemächtigen (手に入れる) [potiri]。
- 4 「理想自我」とは、フロイトの言う「超自我」(Über-Ich) に相当する (Das Ich und das Es, 1923)。フロイトによるとその機能は、1) 自我を観察する、2) 良心、3) 理想、の象徴である。その場合超自我は、現実自我に対して「裁判官」「検閲者」として振る舞うとされる。わかりやすい例ではNHKの人気テレビ番組「チコちゃんに叱られる!」がある。そこに登場し「ボーッと生きてんじゃないよ」と大人に向かって猛省を迫るチコちゃんとは、我々の自己内部にある「超自我」のことであって、それを外に取り出して可視化したものに他ならない。
- 5 関口 (1966: 300) は、再帰表現と人間存在の関係についてこう述べている (旧漢字を新漢字に改めた)。「ただ一つ明らかなのは、[二部分となって対立する二つの自我は] とにかくそのどちらかの迷いに陥入らざらぬにはexistierenすることはできない、その両者の間を絶えずふらふらと揺らぐ如く仕組まれているのが、これがExistenzというものの『仕掛け』、『仕組み』(Struktur) であり、筋書きであり、からくりであるという此の事実です。言語は、言語に特有なる具を以て此のExistenzの『仕組み』を解釈する傾向をもっている。そしてドイツ語のsichならびに再帰語法一般が、此のexistenziale Strukturを解釈する最も特徴的な具である」
- 6 大藪 (2007) は、モノローグで書かれた日本語の表現がドイツ語に翻訳されると、ドイツ語ではこちらが普通のダイアローグとして描かれる例を紹介している。  
「ああ、いかん、いかん。昨日失恋したばかりだというのに」(高橋留美子『めぞん一刻』)  
So ein Quatsch!! Wo du gerade eine unglückliche Liebe hinter dir hast!  
(Casta Caspary 訳 „Maison Ikkoku“)
- 7 Whorf (1939) が提唱した概念で、西ゲルマン語 (英語・ドイツ語・オランダ語) およびフランス語を中心とした言語連合 (Sprachbund) のこと。系統的な類似性に、中世以降の言語接触による均質化が加味されて成立したと考えられる。「主語顕著性」の他に、総合的 (synthetisch) 言語から分析的 (analytisch) 言語への変化、SOVからSVOへの語順の変化、行為者優位性、copula使用の義務化、冠詞の発達、などの共通した特徴を持つ。
- 8 現代日本語において「自分を見つめ直す」「自分探し」のような表現が増えるのは、明治以降「西洋近代的自我」という概念が導入されてからであろう。養老 (2005) を参照。
- 9 メタ認知が強固であるという意味で自我は、日本人よりドイツ人の方がより分裂しているとは言っても、それは相対的な差異に過ぎず、日本文化にそのような例がないことをもちろん意味しない。ここでは二つ事例を挙げておこう。一つ目は、演者が自分を離れて観客の立場で自分の姿を見ることの大切さを説

く世阿弥の能楽論『花鏡』（1424年）に出てくる「離見の見」（その反対は自己中心、自己満足を意味する「我見」）。もう一つは古典落語の「粗忽長屋」に出てくる熊五郎の例で、彼は行き倒れた自分の死体を抱き上げ、「抱かれているのは確かに俺だが、抱いている俺はいったい誰だろう」と自問する。

### 参考文献・使用テキスト

- 池上嘉彦（2000）『「日本語論」への招待』講談社。
- \_\_\_\_\_（2003/2004）「言語における<主観性>と<客観性>の言語的指標（1）/（2）」山梨正明他（編）『認知言語学論考』No.3/No.4、ひつじ書房、1-49/1-60。
- 大藪正彦（2007）「Subjective Construal（主観的事態把握）と日本語・ドイツ語・英語」島根大学学内研究会資料（2007年11月26日）。
- 金谷武洋（2004）『英語にも主語はなかった 日本語文法から言語千年史へ』（講談社選書メチエ）講談社。
- 柴谷方良（1997）「言語の機能と構造と類型」『言語研究』112、1-31。
- 下宮忠雄（2001）『ヨーロッパ諸語の類型論』学習院大学研究叢書33。
- 関口存男（1966）「再歸的表現とExistenzの解釋」『ドイツ語学講話』三修社、251-316。
- 廣瀬幸生・加賀信広（1997）「人を表すことばと照応」『日英語比較選書』4、中右実（編）研究社出版、1-89。
- 松本克己（2006）『世界言語への視座—歴史言語学と言語類型論』三省堂。
- 養老孟司（2005）『無思想の発見』（ちくま新書）筑摩書房。
- Brown, P. & S. C. Levinson（1987）：Politeness: Some Universals in Language Usage. Cambridge: Cambridge University Press.
- Duden（2009<sup>8</sup>）：Die Grammatik. Dudenverlag: Mannheim・Zürich.
- Eisenberg, Peter（2006<sup>3</sup>）：Grundriss der deutschen Grammatik. 2 Bde, Verlag J. B. Metzler: Stuttgart・Weimar.
- Eucken, Rudolf（1908/1914<sup>2</sup>）：Der Sinn und Wert des Lebens. Leipzig.
- Goethes Faust. Der Tragödie erster und zweiter Teil Urfaust. Kommentiert von Erich Trunz. Christian Wegner Verlag: Hamburg 1963.
- Haider, Hubert（1985）：Über *sein* oder nicht *sein*: Zur Grammatik des Pronomens *sich*. In: Abraham, Werner (Hrsg.): Erklärende Syntax des Deutschen. 223-254, Tübingen: Narr.
- Kunze, Jürgen（1977）：Typen der reflexiven Verbverwendung im Deutschen und ihre Herkunft. In: Zeitschrift für Sprachwissenschaft 16.1/2, 83-180.
- Plate, Rudolf（1935）：Zur historischen und psychologischen Vertiefung der deutschen Schulsyntax. Max Huber Verlag: München.
- Schneider, Wilhelm（1960<sup>2</sup>）：Stilistische Grammatik. Die Stilwerte der Wortarten, der Wortstellung und des Satzes. Verlag Herder: Freiburg im Breisgau.
- Whorf, Benjamin Lee（1939）：The Relation of Habitual Thought and Behavior to Language, *Language, Thought, and Reality*. 173-204, Massachusetts: MIT Press.